

ることを思い知ります。ハプスブルグ家とは何で
あつたのか、政治の真っただ中で巨大な権威と權

限を行使してきたヨーロッパの王家や貴族の伝統
や格式、そして帝国の崩壊と王家の没落の激動の
中に生きた王女の生涯を知ることは、興味がつき
ません。

中国、韓国・朝鮮、そしてヨーロッパの激動の
歴史を生きた女性の人生は、私たちの平和な日常
とはあまりにも掛け離れているかも知れません

が、時代と国を越えて共通する人間の生き方に打
たれます。お薦めしたい三冊です。

(お茶の水女子大学)

親子……そして教育

鈴木 みゆき



特集 〈緑蔭図書紹介〉

ここ数年猛暑の盛りは南の島に家族で旅行することにしています。青い青い空と溶け合うコバルトブルーの海を眺めながらただぼんやりと水と戯れ砂と遊ぶ（アブナイおばさん!?)一週間を過ごすのです。ところが、今年は我が家に受験生が出現し！ 本人の自覚とは無関係に時の歯車が迫り立っています。で、やむなく南の島はあきらめて、家で読書と決めました。が、悲しいかな書店にいつても目につくのは『教育』だの『親子』だのワタクシ世界の本ばかり。小中学校のP.T.A役員を掛け持ちしていることもあって『学校』に対する『目』も厳しくなるばかり。そこで今回は燃える親心をじっくりと癒してくれそうな『親子&教育』に関わる本を選んでみました。

まず最初はどうーんと大きく構えて親のまた親の親＝ルーツの謎から迫つて見ましょう。最先端の遺伝子研究から私たち日本人の親＝ルーツを解説した『パラサイト日本人論』（文芸春秋一九九

五）はおなじみ動物行動学者竹内久美子さんの著です。これまでも『そんなバカな!』（文芸春秋）『男と女の進化論』（新潮社）『ワニはいかにして愛を語り合うか』（新潮社・共著）などたくさんの著書があり、ヒトをはじめ生物の利己的遺伝子の野望についておもしろおかしく洞察していました。それがついに日本人のルーツにさかのぼり、しつぽの曲がったネコやらアイヌ、オキナワやら一夫多妻やらあちこち話をとばせながら古モノゴロイドと新モンゴロイドの混血である我々の今について語ってしまうのです。この著者のスゴイところは読み終えた後に「うん、そうかもしれない」と妙に納得してしまうところでしょう。もし不幸にして竹内氏の作品にまだ出合っていない方にはぜひお勧めしたい『パラサイト日本人論』。きっと読んだ後しげしげ鏡を見て自分のルーツ分析をするとうけおいます。

次は遺伝子から創作世界にワープしてみましょ

う。親なるものを深く考えさせてくれるのは『くまのアーネストおじさん』(アックローン一九八三)シリーズでしょう。著者ガブリエル・バンサンのあたたかな目が各場面にこよなくちりばめられていて、大人も泣ける絵本の名作だと私は思います。今回はおしゃまなセレスティーヌがアーネストおじさんの留守中、おじさんの若いころの写真を発見したところから始まる『ふたりでしゃしんを』を挙げておきます。おじさんを独り占めしているつもりだった彼女がすねる可愛しさ。「私とった写真、一枚もないわね」ときちゃんと言える健気さ。そしてそれに応え、町の写真館で二人の写真を撮るアーネストおじさんの優しさ、器の大きさ。血なんてつながらなくても親子は存在すると改めて思わせる私が大好きな作品です。それでもどうして海外には両親の別居や離婚、そして血のつながらない親子を正面からきちんと描いた作品が多いのでしょうか。『一人の

ロッテ』や『このねずみデジレのふたつのいえ』(金の星社)は幼児・小学生向けの作品ですが、三年前、パリの本屋さんで「La séparation」というボードブック(どう考えても3歳児前後向けの製本)を見つけ、仰天したことがあります。それだけ両親の離婚や別居が日常茶飯事になつているということでしょうか。

さて現実に戻り、親となつた以上考えらるをえなくなるのが子どもの教育です。一時ほどではない気もしますが、赤ちゃんが生まれると**式だの××研究所だのからDMがわんさか来て親心をくすぐります。親だって頭のどこかでムダではないかとわかっているはずなのです。でも心は揺れ動きます。「もしかしたら…」「今やつておかないと」「後で後悔するよりは」…そして教育の投資が始まっています。私自身はこの早期教育について論じるつもりはないので、最近出た『カラフルライフ』(文化出版局一九九五)を紹介する

理医学賞受賞の利根川進氏の現夫人で元N H K ディレクター、現在はハーバード大学院生の吉成 真由美さんの実践的教育論です。「だってそのほ うが人生はカラフルに（彩りよく）なりますよ」という友人の言葉、遅咲きのすすめというサブタ イトルからみても、著者がいわんとすることはお わかりいただけだと思います。実際小学校の低学 年で優秀そうに見えたお子さんが高校になると低 空飛行というのはよくある話で、親が子どもの学 ぼうとする意欲をつみとつて先回りして教えても 意味がないといえるでしょう。早期教育の弊害に ついては『ミス エデュケーション』（大日本図 書一九九一）の著者エルキンンドも学習意欲や未 知への関心がいすれ「バーンアウト（燃え尽きて しまう）」といつています。

け皿を作ることなのかもしれないとこれらの本を読むと思うわけです。いくら親がやきもきしても、受験する本人になりかわる訳ではありません。後ろで暖かく見守るゆとりが必要なのだと改めて感じました（私だって本当はそうしたい！）。吉成さんも著書の中でお子さんと接するとき、「ちょっと前まで猿だったと思うようにしています」と書いています。ここまで長いスパンで物事を見られるならば、今、早期教育に狂乱している教育ママも、家庭の関係が崩壊して親子が別居している人も、少しは頭を冷やし、心静めることができるものかもしれません。今年の夏は、縄文時代にさかのぼり、日本人なる探索から始めてみてはいかがでしょうか？

結局親ができる教育というのは、前に出て指岡したりゲキをとぼすのではなく、環境としての受

(聖德大學)